

第5部会

イと同化を対象とした研究が存在する。さらに社会集団あるいは社会層間の葛藤についての言及は多く見られる。また、申命記史家に注目して、彼らの社会的帰属を問う諸研究もある。しかし、これらはもっぱら外圧や利害関係から理解されており、それ自体間違っているのではないが、一面性を免れない。とくに自己（自集団）に不利益となることを自ら進んで行う場合、説明不能となる。

ここで社会的アイデンティティ理論・自己カテゴリー化理論を援用すると、利害に基づく自明な現象と利害に反する一見不合理な現象を統一的に説明することが可能となる。とくに紀元前七世紀後半に行われたと考えられる申命記改革は、古代的な強権によってのみなされたものではなく、利害のみからは理解しづらいケースが多いので、集団間関係と集団内関係をひとつのモデルで分析することができるこのアプローチに期待が持てる。

『啓蒙の弁証法』における反ユダヤ主義

内 藤 李 香

「反ユダヤ主義」は、決してドイツにおける一つの特異な現象ではない。アドルノ (Theodor W. Adorno, 1903-1969) が晩年に述べたこの見解には、「反ユダヤ主義」は単にある特定の人種や宗教の問題としてのみ捉えられるものではないことが

示唆されている。そしてこのようなアドルノの思考方法は、マックス・ホルクハイマー (Max Horkheimer, 1885-1973) とアドルノの共著である『啓蒙の弁証法』第5章に位置づけられている論文「反ユダヤ主義の諸要素—啓蒙の限界 (Elemente des Antisemitismus Grenzen der Aufklärung)」にその起源を見出すことができる。本発表では、「反ユダヤ主義」の起源として見出されうる、その本質的要素とはいったい何かという問いのもとに、同論文第1節から第4節に考察対象を絞ったうえで、以下にあげる三点が検討された。

(1) 「反ユダヤ主義」のもつ「盲目性」「志向喪失性」

ユダヤ人は、とりわけ近代以降「資本主義的」な生産形態を支えた。しかしながら、そうであるがゆえに、資本主義的形態下で経済的に「苦しむはめになった」一般民衆にとっては、逆にユダヤ人に対する嫌悪感を招いてしまったのである。ユダヤ人が優位を占めているような近代社会における経済政策によって助長された、経済的に「満足できない」人間にひそむ「ユダヤ人敵視」という「正しい認識に逆らった」、いわば「無意識的な」反応。そこに見出される、「盲目性」および「志向喪失性」が「反ユダヤ主義」の本質なのである。

(2) 「反ユダヤ主義」の本質的性格—「悪しき平等主義 (Gleichmacherei)」

(1)の議論なかでホルクハイマーとアドルノは、民衆レベルでの「反ユダヤ主義」に常に付きまとっている性格として「悪しき平等主義」という言葉を取り上げる。法の下では「平等」と言われ、「幸福」—ここでは「経済的所有」とそれに伴う

「優雅な暮らし」、そして「インテリというイメージ」——があたかも実現されているかのごとく語られているけれども、当の民衆自身は、「階級差が存在する限り」、この「幸福」の実現は「偽りであり続ける」ことをそれとなく感じ取っていた。この民衆の「幸福への想い」と同時にある「否定された願望像」が、民衆の憤激——ユダヤ人に対する嫌悪感——を呼び起こしたのであり、「悪しき平等主義」の正体である。

(3)「反ユダヤ主義」に内在する「宗教的敵意 (religiose Feindschaft)」

さらにホルクハイマーとアドルノは、反ユダヤ主義の内部には「ひそかに宗教的敵意が内在している」ことを指摘する。この敵意には「偶像禁止」をめぐる問題が関連している。すなわちキリスト教は、人間であるイエスを「神」としたことで、「偶像崇拜」を生み出してしまった。この「キリストを通じての神の人間化」こそ、「一切の誤謬の源泉」だと解釈している。このことにより、「キリスト教会は、とにかく教会の定めた教えに従えば、人々は救済への道を見出すだろうということを基にして成り立っているはずなのに」、この目標となる救いそのものの聖なる価値が「奪われてしまって」いるため、非真理であるに他ならないのである。つまり「反ユダヤ主義の宗教的起源」とは、「キリスト教よりもユダヤ教の方が優位にある」ことを感じていながらも、そのような意識を抑えつけて、「キリスト教を確実な所有物だと信じ込んだ」人々に内在するユダヤ人憎悪なのである。

改宗制度にみる

ユダヤ教のアイデンティティ定義

櫻井 丈

ユダヤ教研究においては、ミシュナー・タルムードをはじめとしたラビ文献及び第二神殿時代のユダヤ文献の文脈から「ユダヤ教」及び「ユダヤ・アイデンティティ」を問い直す学術的作業がここ十年でなされてきている。そこで一貫するアプローチは「ユダヤ教」を宗教現象としてのみ限定するのではなく、ひとつの出自、法規範、文化慣習を含んだ包括的なエスニック共同体として捉えるというものである。Shaye J. D. Cohenはその著作、*The Beginnings of Jewishness*において、地中海世界の思想的潮流であるヘレニズムとの邂逅を通して、西アジアにおけるパレスチナ地方に居住する血縁によって結びついた部族連合体である古代イスラエルとしてのエスニック・アイデンティティの枠組みが宗教慣習を含むユダヤ人 (Judean/777) のそれへと変化していったと指摘する。その枠組みの一つとは元来、集団の外部に位置する他者である異邦人が「改宗」という制度を通してユダヤ教共同体の成員として帰属するというものである。特に第二神殿時代において、ハスモン王朝下における周辺民族によるユダヤ教への集団改宗の事例などから、こうした他集団への帰属、同化は古代において顕著であることがわかってきており、何がしかの形で後代のラビ・ユダヤ教の改宗